

海外学術調査総括班 平成 18 年度海外派遣報告

報告書タイトル : 《危機》のグローバル・イシューに対する超域的研究ネットワーク

報告者 : 真島一郎

「わたしたちは、もう疲れきっている」(有毒廃棄物に関するアクエド住民代表の発言)

報告者は、2006 年 11 月 16 日より同月 30 日まで、コートディヴォワール共和国に出張し、標記タイトルに関する予備調査を行った。

I. 調査の背景

政府と反政府勢力のあいだで国土を二分する内戦状態が 2002 年 9 月以来継続してきたコートディヴォワール共和国の経済首都アビジャン *Abidjan* で、本年 8 月に有毒物質の不法投棄事件が発生した。同事件は、アビジャン市民の健康と日常生活に甚大な被害をもたらただけでなく、以下の概要からも知られるように、国際的規模にまたがる環境(汚染)問題の側面を有していた。

2006 年 8 月 19 日、アビジャン港に停泊していたオランダの石油・金属商社トラフィギュラ *Trafigura Beheer BV* 社(本拠地スイス)のチャーター船、プロボ・コアラ *Probo Koala* 号(パナマ船籍、ギリシア系企業保有、538t)から有毒スラッジ約 400 トンが荷下ろしされ、現地の廃棄物処理会社が用意した複数のタンク車に移しかえられたうえで、アビジャン市内の屋外ごみ集積場、計 17 カ所でひそかに投棄された。

廃棄物から自然発生するガスを吸入したアビジャン市民の被害は、投棄から約 2 週間が経過した 9 月初旬から顕著となり、呼吸器系障害、頭痛、中毒症状におちいった被害者は同月半ばまでに約 9000 名、入院患者 69 名、死者 6 名にのぼった(医療要請は総計約 10 万件。死者はその後 15 名に拡大)。廃棄された問題の有毒物質は石油精製後のスラッジ、あるいは船内タンクを洗浄する際に使用された石油と苛性ソーダの混合物で、そこから硫化水素ないし有機塩素を含有する毒性の高いガスが発生したものとみられている(7)。

一方、報告者は事件の発生以来、アビジャン在住の研究者や知人と折にふれ連絡をかかわしてきた。その過程で、海外学術調査の展開を介した「フィールドワークの理論と手法に関する総合調査」という本研究課題の遂行にとり、今回のアビジャン有毒廃棄物事件が研究者にたいし、二様の次元における超域的研究ネットワークの可能性を模索するよう要請している点に思いいたった。

第一にこの事件は、いわゆる「先進国」と「途上国」のあいだに不均衡なしかたで存在する政治・経済上の構造的な関係が、産業廃棄物の処理法をめぐる問題としてあらためて表出したという点で、単に西アフリカー都市の事件にとどまらない「危機」のグローバル・イシュー、地球規模におよぶ環境地政学的な超域性をおびている。

また第二に、環境にまつわる社会的事象一般についていえるように、この事件にまつわる事実関係の認証・分析作業には、「危機」に対する研究の超域性、とりわけ自然科学と人文・社会系科学の域をまたいだ分野複合的な超域性が研究者サイドに求められているこ

とはいうまでもない(2)。

本年度海外派遣の主たる重点地域は東南アジアであったが、報告者は以上の観点からアビジャン有毒廃棄物事件の緊急予備調査に考察上の意義をみだし、現地への短期渡航計画を立案した。じっさいの渡航は、事件から約3カ月が経過し、アビジャン市内の情勢がある程度まで落ち着きをとりもどした11月後半となった。報告者はこれと同じタイミングで、AA研と現地NGOの共催（AA研運営交付金支出）による国際シンポジウム、『OJA=アビジャン2006—環境・映像・「人間の安全保障」をめぐる緊急国際集会』の開催（2006年11月23-24日）をアビジャン市内で計画していた。タイトルからも窺えるとおり、同シンポジウムの目的は、アビジャン有毒廃棄物事件の意味を「人間の安全保障」の観点から共同討議するというものであり、他方において、同じ事件への学術的対応にフィールドサイエンスにおける超域的研究ネットワークの可能性をさぐるようとする上記調査は、シンポジウム開催前後の期間（2006年11月16-21日、同月26-29日）を利用して、おもにシンポジウム参加者・発言者との対話や研究交流をつうじ集中的に遂行された(3)。

II. 危機のグローバル・イシュー

2006年11月現在の時点で、アビジャン市有毒廃棄物の処理作業はいまだ大幅に遅滞し、複数の区域が立入禁止となったまま、市内の畑でとれた作物のどれを食べれば安心のかも具体的に判然としないまま、一般市民の日常をなおも大きな不安が覆っている状況だった。事件発覚後には、政府の対応に抗議するアビジャン市民のデモが生じて、首相以外の全閣僚が更迭されたほか、適正な処理施設が不在であるにもかかわらず破格の引取料(1000万CFAF、約234万円相当)で有毒物質の処理を請け負った現地企業三社の関係者7名が逮捕されていた。くわえて報告者が今回アビジャンに滞在していた時点では、アビジャン港の税関責任者らも刑事訴追されるとともに、国家という政治社会の内外をまたぐ「責任*responsabilité*」の問題が、イヴォワール社会の論壇をにぎわしていた。

事件に対する国際社会の対応は比較的速かった。9月初めにはフランスの専門家らが有毒廃棄物調査でアビジャンに急派されたほか、WHO、OHCA（国連人道問題調整事務所）、UNEP（国連環境計画）も現地に調査団を送り、EUは問題の船舶プロボ・コアラ号への立入検査を行っている。ただし、この事件が国際的視野から検証されねばならないのは、事後における国際社会の対応を検討するためというより、むしろ国際環境保護の観点からかつてバーゼル条約（正式名称：有害廃棄物の国境を越える移動及びその処分の規制に関するバーゼル条約。1992年発効）の採択を促したものと同一の構図、すなわち「先進国」で産出した有毒廃棄物が、その安価な処理地とみなされた「途上国」においてきわめて不十分なしかたで処理され、住民の日常的な生活環境と健康を著しく脅かす構図が、超域的（グローバル）次元で執拗に反復されているがためである。バーゼル条約制定の発端となった「ココ事件」の舞台ナイジェリアで、有害物質を含有したPCや携帯電話などのデジタル・スクラップが今日もなお欧米諸国から大量に運びこまれ、不法に、だがなかば公然と投棄・焼却されている事実は、あくまでその一例にすぎない。

人間の安全が脅かされる「危機」のグローバル・イシュー、とりわけ環境関連の問題に対し、地域研究の枠をこえた次元での超域的研究ネットワークの可能性が模索されてしかるべきなのは、むしろ「エコマフィア」の介在による上記のごとき有毒廃棄物の違法輸送

問題にかぎらない。今回のシンポジウム主催機関のひとつである現地文化 NGO、CARAS（アフリカ演劇コミュニケーション研究・育成・創成センター；*Centre africain de recherche, formation et création en Arts du spectacle et communication*）のメンバーから得た情報によれば、ヨーロッパ諸国から西アフリカ随一の産油国ナイジェリアへ向かう石油タンカーがギニア湾上で船内タンクを洗浄する際に原油が流出する結果、コートディヴォワール沿岸でも大量のオイルボールが発見されていることが、専門家の調査により判明しているという。また、同じく今回のシンポジウムに発言者として参加した人類学者・溝口大助氏（日本学術振興会特別研究員（PD）。隣国マリ共和国で長期フィールドワークを遂行中）から御教示いただいた事例とは、ひとりの村落住民が偶然金鉱脈を発見したことから、現地の社会と自然環境が互いに相互作用しつつ、それぞれ劇的な変容をとげていくのかという、溝口氏自身の調査村の事例であった(4)。

オイルボールの汚染問題にせよ、天然資源の急激な開発をもたらす社会・自然環境の相互変容問題にせよ、これら西アフリカの事例が、世界各地における類似事例の考察にむけてダイレクトに照射されるような超域的研究ネットワークの構築が展望されるところであり、本総括班では、地球環境汚染の諸現象に対する、上記研究ネットワーク構築の方途が局所的な次元ではすでに模索されはじめている(5)。

Ⅲ. 危機に対する研究の超域性

アビジャン有毒廃棄物事件に代表されるような地球環境（汚染）問題の事例に対して、文理共存を旨とする分野複合的な超域性が求められるというとき、それは各分野独自の調査成果の、単なる合算値ないし寄せ集めを期待したうえでの提言ではない。換言すれば、医学研究者が有毒物質の成分分析とその人体への影響度を測定し、法学者が廃棄物処理業者におけるバーゼル条約違反の是非を、別個に検討することの可能性がいま問われているわけではない。各分野ごとの調査成果を単純にとりまとめたもので十分であるならば、そもそも分野横断的な研究ネットワークを構築する必要もないことになる。

有毒廃棄物に対する科学的な処理は、2006年11月時点のアビジャン市内でほとんど進捗していなかった。とりわけ、アビジャン在住の一般市民が食生活（地元農産物）の安全性に多大な不安をいだいていたのは、当地の汚染土壌対策がほとんど講じられていないためであった。さて、有毒廃棄物の土壌汚染度についての理学的測定がむろん不可欠であるとしても、その分析が今回対象とする土壌のうえに存在するのは、政治、経済、社会、歴史といった複数の人間的要因がとりわけ濃密に錯綜する西アフリカ屈指の都市空間、アビジャンである。「危機」発生後の学術的対策として研究者がなすのは、それゆえ単なる言葉の飾りという以上の、真の意味にいつそう近づいた「文理共存」の総合的分析、この事例に託していえば、汚染土壌の成分分析や、中毒症状に陥った人体への医学的ケアから、環境政策、都市工学にまでおよぶ知見の相互乗り入れとネットワーク化が不可欠である。

報告者がみずからの専攻分野を意識して付言すれば、しかしいうところの総合的分析はそれだけでは必ずしも十分といいがたい。「危機」に対する社会諸科学の貢献には、原理上システム管理の色彩がつよく、システムとしての国家や社会以上に「危機」にさらされているはずの生身（なまみ）の人々の姿は、ややもすれば省察の射程から漏れおちるおそ

れがある。まして今日のコートディヴォワール共和国が内戦状況下にある点を鑑みれば、人びとの苦悩の深みは二重、三重のものといつてよい。

報告者は今回のアビジャン調査期間中に、市内有毒廃棄物事件で最大の被害をうけたアクエド Akouédo 地区住民を代表する青年たち — 上記シンポジウムの参加者 — と出会った。一般にはイヴォワール国軍海兵隊の拠点として知られるアクエドは、同時に大都市アビジャンから排出されるゴミの一大集積場でもあり、そうして無差別に寄せ集められた種々の廃棄物に由来する深刻な健康問題は、周辺住民にとって今に始まったことではなかった。アクエド代表の青年は、現下の惨状を伝えるために、あえて地元のエブリエ Ebrié 語 (6) で語る手段を採った。聴き手にまわった報告者にとり、それは国外のジャーナリストや研究者の耳からは、フランス語を介さぬ彼ら自身の日常の声がいかに漏れおちやすいかを、メタメッセージとして伝えているように感じられた。文化・社会人類学をはじめとする人文系諸分野のフィールドワーカーが、地球環境の「危機」に対する超域的（分野横断的）研究ネットワークの一面に参加しうるとすれば、それはおそらく、システム管理とはほとんど無縁な、そうした人びとの声にただ耳を傾けることにあるだろう。アクエド地区住民を代表するそのエブリエ語の声には、おなじアクエド地区の青年による通訳がついていた。彼がフランス語に逐一翻訳したことばを報告者はノートに走り書きした。そのなかでも、報告者の心にとりわけ忘れがたく刻まれたことばがいくつかあった。

「わたしたちは、もう疲れきっている」

「わたしたちは、さげすまれているのだ」

「わたしたちの目標は、社会にある」

超越性を目的にかかげ、海外学術調査にたずさわる研究者がいかに精緻な研究ネットワークを今後構築しようとも、当のネットワークからこれらの声が脱落することは、けっしてあってはならない。

● 註

(1)

有毒物質の取引をめぐる概要については、朝日新聞記者・大野良祐氏による次の記事がくわしい。<http://www.asahi.com/special/070110/TKY200703070241.html>

(2)

環境関連のグローバル・イシューをめぐる二様の超越性については、アビジャン渡航直前の時点における講演でも言及した。真島一郎「人間の安全をめぐる多重性と超越性」東京4大学連合文化講演会『安全と安心の未来をさぐる』（2006年10月30日、一橋記念講堂、概要については <http://www.ier.hit-u.ac.jp/kouenkai0610/>）。

(3)

シンポジウムの概要については、次を参照。http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/fsc_lectures.html。

(4)

溝口大助「ある金鉱の村（マリ南部）をめぐる映像の細片」（註3のURLを参照）

(5)

高樋さち子「マレーシア・サバ州における開発と環境消失の時空間分析－Landsat 利用による」（総括班の共催による「第三回フィールドサイエンス・コロキウム」での口頭報告、2007年7月11日、<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/fscolloq03.html>）。

(6)

現アビジャン市をかつて居住域の一部としていたアカン系住民の言語。